

## 「使用上の注意」の改訂に関するお知らせ

2018年4月

 日本ジェネリック株式会社

このたび、以下の弊社製品につきまして、「使用上の注意等」の一部を改訂致しましたので、お知らせ申し上げます。ご使用に際しましては、改訂後の各項を十分ご参照くださいますようお願い申し上げます。

なお、今後とも弊社製品のご使用に当たって、副作用等の治療上好ましくない事象をご経験の際には、弊社 MR までできるだけ速やかにご連絡くださいますようお願い申し上げます。

製品名	製造販売元
アリピプラゾール錠 3mg/6mg/12mg 「JG」	日本ジェネリック株式会社
アリピプラゾール OD 錠 3mg/6mg/12mg/24mg 「JG」	日本ジェネリック株式会社
クエチアピン錠 25mg/100mg/200mg 「JG」	日本ジェネリック株式会社
ハロペリドール錠 0.75mg/1.5mg/1mg/3mg 「JG」	長生堂製薬株式会社
リスペリドン錠 1mg/錠 2mg/錠 3mg/細粒 1% 「CH」	長生堂製薬株式会社

### 1. 改訂内容

(1) 厚生労働省医薬・生活衛生局医薬安全対策課長通知（平成 30 年 3 月 27 日付）に基づき、次の通り改訂を致しました。

- ・概要：「禁忌」の項の「アドレナリンを投与中の患者」に「(アドレナリンをアナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)」を、また、「相互作用(1)併用禁忌」の項の「アドレナリン」に「(アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)」を追記致しました。
- ・理由：アドレナリンと $\alpha$ 遮断作用を有する抗精神病薬の併用については、薬理的に血圧低下が起こるおそれがあるものの、アナフィラキシーは致命的な状態に至る可能性があり、迅速な救急処置としてアドレナリン投与が必要とされることから、アナフィラキシー治療時に患者の急な容態の変化にも対応できる体制下においてアドレナリンを使用することは、リスクを考慮しても許容できると判断されたため。

(2) 以下の製品について、次の通り自主改訂致しました。

- ・アリピプラゾール錠 3mg/6mg/12mg 「JG」、アリピプラゾール OD 錠 3mg/6mg/12mg/24mg 「JG」  
「副作用(1)重大な副作用」の項の「悪性症候群」の「急性腎不全」を「急性腎障害」に記載整備致しました。
- ・ハロペリドール錠 0.75mg/1.5mg/1mg/3mg 「JG」  
「副作用(1)重大な副作用」の項の「悪性症候群 (Syndrome malin)」及び「横紋筋融解症」の「急性腎不全」を「急性腎障害」に記載整備致しました。

新旧対照表は次頁以降に掲載しておりますので、ご確認ください。

### 2. DSU掲載

使用上の注意改訂情報は、2018年5月発行予定の「医薬品安全対策情報 (DSU) No.269」に掲載されます。

今回の使用上の注意改訂等を反映した添付文書情報につきましては、以下のホームページよりご確認ください。

- ・医薬品医療機器総合機構ホームページ(<https://www.pmda.go.jp/>)
- ・日本ジェネリック株式会社 医療関係者さま向けページ (<http://www.nihon-generic.co.jp/medical/>)

お問合せ先：日本ジェネリック株式会社  
安全管理部 TEL：03-6810-0502

### 3. 新旧対照表（抜粋）

- ・アリピプラゾール錠 3mg/6mg/12mg 「JG」
- ・アリピプラゾール OD 錠 3mg/6mg/12mg/24mg 「JG」

(改訂箇所 \_\_\_\_\_ 部)

改訂後			改訂前																	
<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(2)〈変更なし〉                      (3)アドレナリンを投与中の患者（アドレナリンをアナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く）（「3.相互作用」の項参照）                      (4)〈変更なし〉</p>			<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(2)〈省略〉                      (3)アドレナリンを投与中の患者（「3.相互作用」の項参照）                      (4)〈省略〉</p>																	
<p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は、主として肝代謝酵素CYP3A4及びCYP2D6で代謝される。</p>			<p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は、主として肝代謝酵素CYP3A4及びCYP2D6で代謝される。</p>																	
<p>(1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>薬剤名等</th> <th>臨床症状・措置方法</th> <th>機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)</td> <td>アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。</td> <td>アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>-受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>-受容体遮断作用により<math>\beta</math>-受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> <tr> <td>ボスミン</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。	ボスミン			<p>(1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>薬剤名等</th> <th>臨床症状・措置方法</th> <th>機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アドレナリン ボスミン</td> <td>アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。</td> <td>アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>-受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>-受容体遮断作用により<math>\beta</math>-受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> </tbody> </table>			薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子																		
アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。																		
ボスミン																				
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子																		
アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。																		
<p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈変更なし〉</p>			<p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈省略〉</p>																	
<p><b>4.副作用</b>                      本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。</p>			<p><b>4.副作用</b>                      本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。</p>																	
<p>(1)重大な副作用（以下、全て頻度不明）</p> <p>1)悪性症候群：無動緘黙、強度の筋強剛、嚥下困難、頻脈、血圧の変動、発汗等が発現し、それにひきつづき発熱がみられる場合は、投与を中止し、体冷却、水分補給等の全身管理とともに適切な処置を行うこと。本症発症時には、白血球の増加や血清CK (CPK)の上昇がみられることが多く、また、ミオグロビン尿を伴う腎機能低下がみられることがある。なお、高熱が持続し、意識障害、呼吸困難、循環虚脱、脱水症状、急性腎障害へと移行し、死亡することがある。</p> <p>2)～11)〈省略〉</p>			<p>(1)重大な副作用（以下、全て頻度不明）</p> <p>1)悪性症候群：無動緘黙、強度の筋強剛、嚥下困難、頻脈、血圧の変動、発汗等が発現し、それにひきつづき発熱がみられる場合は、投与を中止し、体冷却、水分補給等の全身管理とともに適切な処置を行うこと。本症発症時には、白血球の増加や血清CK (CPK)の上昇がみられることが多く、また、ミオグロビン尿を伴う腎機能低下がみられることが多く、また、ミオグロビン尿を伴う腎機能低下がみられることがある。なお、高熱が持続し、意識障害、呼吸困難、循環虚脱、脱水症状、急性腎不全へと移行し、死亡することがある。</p> <p>2)～11)〈省略〉</p>																	
<p>(2)その他の副作用                      〈省略〉</p>			<p>(2)その他の副作用                      〈省略〉</p>																	

(2018年4月改訂)

- ・クエチアピン錠 25mg/100mg/200mg 「JG」

(改訂箇所 \_\_\_\_\_ 部)

改訂後			改訂前																	
<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(2)〈変更なし〉                      (3)アドレナリンを投与中の患者（アドレナリンをアナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く）（「3.相互作用」の項参照）                      (4)～(5)〈変更なし〉</p>			<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(2)〈省略〉                      (3)アドレナリンを投与中の患者（「3.相互作用」の項参照）                      (4)～(5)〈省略〉</p>																	
<p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は複数の経路で広範に代謝される。本剤の代謝に関与する主なP450酵素はCYP3A4である。</p>			<p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は複数の経路で広範に代謝される。本剤の代謝に関与する主なP450酵素はCYP3A4である。</p>																	
<p>(1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>薬剤名等</th> <th>臨床症状・措置方法</th> <th>機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)</td> <td>アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。</td> <td>アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>-受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>-受容体遮断作用により<math>\beta</math>-受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> <tr> <td>ボスミン</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。	ボスミン			<p>(1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>薬剤名等</th> <th>臨床症状・措置方法</th> <th>機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アドレナリン ボスミン</td> <td>アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。</td> <td>アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>-受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>-受容体遮断作用により<math>\beta</math>-受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> </tbody> </table>			薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子																		
アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く)	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。																		
ボスミン																				
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子																		
アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。																		
<p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈変更なし〉</p>			<p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈省略〉</p>																	

(2018年4月改訂)

改 訂 後	改 訂 前												
<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(5)〈変更なし〉                      (6)アドレナリンを投与中の患者（アドレナリンをアナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く）（「3.相互作用」の項参照）                      (7)〈変更なし〉</p> <p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は、主として薬物代謝酵素CYP2D6およびCYP3A4で代謝される。                      (1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>薬剤名等</th> <th>臨床症状・措置方法</th> <th>機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く) ボスミン</td> <td>アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。</td> <td>アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>-受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>-受容体遮断作用により、<math>\beta</math>-受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈変更なし〉</p> <p><b>4.副作用</b>                      本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。</p> <p>(1)重大な副作用（頻度不明）</p> <p>1)悪性症候群（Syndrome malin）：無動緘黙、強度の筋強剛、嘔下困難、頻脈、血圧の変動、発汗等が発現し、それにひきつづき発熱がみられる場合は、投与を中止し、体冷却、水分補給等の全身管理とともに適切な処置を行うこと。本症発症時には、白血球の増加や血清CK（CPK）の上昇がみられることが多く、また、ミオグロビン尿を伴う腎機能の低下や、筋強剛を伴う嘔下困難から嚥下性肺炎が発現することがある。                      なお、高熱が持続し、意識障害、呼吸困難、循環虚脱、脱水症状、急性腎障害へと移行し、死亡した例が報告されている。（〈用法・用量に関連する使用上の注意〉、「1.慎重投与」の項参照）</p> <p>2)～6)〈変更なし〉</p> <p>7)横紋筋融解症：横紋筋融解症があらわれることがあるので、筋肉痛、脱力感、CK（CPK）上昇、血中および尿中ミオグロビン上昇等が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。また、横紋筋融解症による急性腎障害の発症に注意すること。</p> <p>8)～9)〈変更なし〉</p> <p>(2)その他の副作用                      〈変更なし〉</p>	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く) ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により、 $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。	<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(5)〈省略〉                      (6)アドレナリンを投与中の患者（「3.相互作用」の項参照）                      (7)〈省略〉</p> <p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は、主として薬物代謝酵素CYP2D6およびCYP3A4で代謝される。                      (1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>薬剤名等</th> <th>臨床症状・措置方法</th> <th>機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アドレナリン ボスミン</td> <td>アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。</td> <td>アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>-受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>-受容体遮断作用により、<math>\beta</math>-受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈省略〉</p> <p><b>4.副作用</b>                      本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。</p> <p>(1)重大な副作用（頻度不明）</p> <p>1)悪性症候群（Syndrome malin）：無動緘黙、強度の筋強剛、嘔下困難、頻脈、血圧の変動、発汗等が発現し、それにひきつづき発熱がみられる場合は、投与を中止し、体冷却、水分補給等の全身管理とともに適切な処置を行うこと。本症発症時には、白血球の増加や血清CK（CPK）の上昇がみられることが多く、また、ミオグロビン尿を伴う腎機能の低下や、筋強剛を伴う嘔下困難から嚥下性肺炎が発現することがある。                      なお、高熱が持続し、意識障害、呼吸困難、循環虚脱、脱水症状、急性腎不全へと移行し、死亡した例が報告されている。（〈用法・用量に関連する使用上の注意〉、「1.慎重投与」の項参照）</p> <p>2)～6)〈省略〉</p> <p>7)横紋筋融解症：横紋筋融解症があらわれることがあるので、筋肉痛、脱力感、CK（CPK）上昇、血中および尿中ミオグロビン上昇等が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。また、横紋筋融解症による急性腎不全の発症に注意すること。</p> <p>8)～9)〈省略〉</p> <p>(2)その他の副作用                      〈省略〉</p>	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により、 $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子											
アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く) ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により、 $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。											
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子											
アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により、 $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。											

改 訂 後	改 訂 前												
<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(2)〈変更なし〉                      (3)アドレナリンを投与中の患者（アドレナリンをアナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く）「3.相互作用」の項参照                      (4)〈変更なし〉</p> <p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は主として肝代謝酵素CYP2D6で代謝される。また、一部CYP3A4の関与も示唆される。</p> <p>(1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">薬剤名等</th> <th style="text-align: center;">臨床症状・措置方法</th> <th style="text-align: center;">機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="vertical-align: top;">アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く) ボスミン</td> <td style="vertical-align: top;">アドレナリンの作用を逆転させ、血圧降下を起こすことがある。</td> <td style="vertical-align: top;">アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>受容体遮断作用により<math>\beta</math>受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈変更なし〉</p>	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く) ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ 受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ 受容体遮断作用により $\beta$ 受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。	<p><b>【禁忌（次の患者には投与しないこと）】</b>                      (1)～(2)〈省略〉                      (3)アドレナリンを投与中の患者（「3.相互作用」の項参照）                      (4)〈省略〉</p> <p><b>【使用上の注意】</b>  <b>3.相互作用</b>                      本剤は主として肝代謝酵素CYP2D6で代謝される。また、一部CYP3A4の関与も示唆される。</p> <p>(1)併用禁忌（併用しないこと）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">薬剤名等</th> <th style="text-align: center;">臨床症状・措置方法</th> <th style="text-align: center;">機序・危険因子</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="vertical-align: top;">アドレナリン ボスミン</td> <td style="vertical-align: top;">アドレナリンの作用を逆転させ、血圧降下を起こすことがある。</td> <td style="vertical-align: top;">アドレナリンはアドレナリン作動性<math>\alpha</math>、<math>\beta</math>受容体の刺激剤であり、本剤の<math>\alpha</math>受容体遮断作用により<math>\beta</math>受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2)併用注意（併用に注意すること）                      〈省略〉</p>	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ 受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ 受容体遮断作用により $\beta$ 受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子											
アドレナリン (アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く) ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ 受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ 受容体遮断作用により $\beta$ 受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。											
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子											
アドレナリン ボスミン	アドレナリンの作用を逆転させ、血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ 受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ 受容体遮断作用により $\beta$ 受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。											

(2018年4月改訂)